

哈密出發以來、依然戈壁地帯たるを免れざるが、而も天山の支脈南北に走せ、日々其の餘勢の山を踰え、水を涉りて戈壁地帯中、復た戈壁の念を懷かず、久しく戈壁に飽きし予は、固より風光の掬すべきもの有らずと雖も、暫く上下の曲線に慰められしに、今や再び荒涼たる沙漠を漂泊せざるべからず。土墩子を發し更に行くこと約四里、一小河を渡る。幅約六米突、春時は融雪水あるも、他季は絶て無し、又行く一里餘漸く治格墩ヤクダに入る（西鹽池より約二十四里）時に十三日午前七時なり。附近人家部落相合して百十九家、纏頭最も多く、漢回之に亞ぎ、耕地千數百畝、麥、高粱野菜の類を耕作す。飲料は三泉二井ありて、泉水は清良、井水は鹹味を含めり。此地二柵の馬兵を置く（每兵毎月馬糧と共に五兩、什長六兩、哨官三十五兩を給せらるゝと云ふ。東方十三間房を経て瞭墩に通する捷路の分岐點とす。

五 晝行關展城ピテンに入る

十四日午前六時四十分、治格墩を發す。肅州以來晝夜を轉倒し、即ち晝は寢ね夜は行くを常とせしが、此日より晝行を始む。夜は何處迄も陰氣なり。晝は何と無く陽氣なり。車を棄て、馬に鞭ち、左顧右眄、心の駒の勇むを覺ゆ。前程も從來と